

## 1. 授業の位置づけと目的

本授業は、大学院学校教育専攻における平成22,23年度のカリキュラム改革によって誕生した科目である。前期中心の共通基礎科目の一つであり、「子どもの発達と学習」領域に属している。授業目的(シラバス)は、『『生きる力』の育成を、『学びを通しての自己形成』という視点から捉え、学校での学びとその支援の過程における、＜学習－動機づけ－自己＞の関係性を教育心理学的な視点から考え、実践的な課題と関係づける。』とした。到達目標は主に、①授業スケジュール(本ページ右段)に示される授業のキーワードについて理解し説明できること、②授業や教育的活動を通して動機づけが喚起され、その学びを通して自己が意識化され形作られる過程について仮説的に説明できること、および、①②に基づいて、③授業への意欲を高める支援、学習がふるわない子どもの支援、授業や教育活動を通しての子どもの自己形成への支援について授業設計や個別的支援を意識できること、という3点である。

同時に、本授業は「学校心理士」資格関連科目(「教授・学習心理学」領域)として指定されているため、例年、受験資格取得を目指す院生が他専攻からも受講している。本年度の受講者数(内訳)は、学校教育専攻1名、学校臨床心理専攻(臨床心理学コース)4名、計5名であった。全員がM1であり、学校心理士資格取得の希望者であった。現職教員の大学院生は含まれていない(本授業開始以来初)。

## 2. 授業内容、および授業評価

(1)授業内容 授業スケジュールのような内容系列をシラバスに示した。授業スケジュールの最初の数回部分は、授業趣旨の理論的位置づけなどの講義も必要とするため、筆者が担当する。

これらの内容系列のうち、下線を付したテーマ(授業回)は、受講者が関心に応じて選択した回であり、後述のように、受講者による

発表を中心とした授業回となる。なお、受講者が選ばなかったテーマは単純に除外されるのではなく、担当者のいる回の一部割り付け直したり、橋本が講義を行って、シラバス全体で意図した主要な要素(特に、学校心理士科目として指定された5事項：学習の心理学的理論、記憶と理解、動機づけ、学習指導と授業、学級集団とその組織化)についておさえるようにした。

第1回 授業のガイダンス

第2回 わかろうとする子どもと学びの仕組み

第3回 わかろうとする子どもと動機づけ

第4回 興味・関心の形成と発達

第5回 体験活動からの学びと意欲 その1

第6回 体験活動からの学びと意欲 その2

第7回 人とのかかわりと学びの意欲 その1

第8回 人とのかかわりと学びの意欲 その2

第9回 学習の過程で自分と向き合う (個別指導)

自律的な学習方略とメタ認知、認知カウンセリング、学習不応答ほか

第10回 自己の将来像や自覚化を目指した実践：将来の夢・目標(キャリア指導)と学習意欲

第11回～14回 自己概念、将来像を明確にし、自尊感情をたかめるための教育実践例の検討：「いのちの教育」,「心理教育」,「学級の人間関係づくりとコミュニケーションスキル」,「キャリア教育と自己」の4つから選択。

第15回 総括的な議論：総括レポート作成指示。

(2)授業評価方法：量的なアンケートは実施しなかった。評価のための情報としては、第1に、受講者が担当した発表内容に対する感想・コメントのメール内容を用いた(これは、今期の授業では5回得られた。発表者自身も提出)。第2に、各自の発表とは別に、学期末に提出するレポート課題の1つとして、授業全般への感想を求め、シラバス等との関連で、授業内容・方法等の改善点の指摘を依頼した。本稿では、これらに寄せられた自由記述を適宜抜粋・引用しつつ、授業内容・方法の評価を試みる。

### 3. 授業方法の工夫と評価

#### (1)発表づくりの準備と支援： 時間外学習その

の1 受講者が選択したテーマについては、選択した受講者が、文献を調べて発表を行うという「演習」の形式をとる。しかし、本授業では単なる指定研究文献(図書)を分担して読解を行うのではなく、「その日は担当者(受講者)さんに授業をしてもらう」という言い方で、選択した回の主テーマについて広く学習して準備してもらう。発表の際は、約60分を使い、実際に発問を工夫したり、アセスメントのデモンストレーション、学校現場での実践例(放送動画や、現職の場合は自己の実践例)が提示されるなど、意欲的な発表になることが多い(通常パワーポイント提示が使用される)。

発表者は、準備のため、筆者と基本的に2回、各1コマ程度、授業時間外に打ち合わせを持つ。まず発表の3週間程度前に「文献相談」をする。これは発表の枠組み(主要な柱立て)をシラバスのキーワードと興味の在処に基づいて協議し、押さえるべき文献を紹介(または貸与)する場である(文献リストは必ず配布する)。柱立てには、蓄積された過年度のレジュメを参照してもらうこともある。その後、ある程度文献読解やプレゼン準備が進んだ際(あるいは準備に行き詰まった際)に必要な応じて2回目の相談に応じている。ビデオを貸与する等の支援もする。この2回の打ち合わせを通して、発表者は筆者と議論を重ね、結果的に概論的な解説も受けて、今度は各自がその内容をより深く理解し自分なりに工夫して、発表日に自分の「授業」に挑戦する。

<評価コメントより>

**感想1(期末レポート)：**本講義の感想として、第一に勉強になったということです。(中略)また、自分で調べるだけでなく、発表するということでも**責任**が芽生えて学びが深まったということも感じました。それは自分の発表以外の方の発表の方の発表も**責任**をもって聞くということにも繋がったのではないかと思います。(発表が一番だったことも大きく影響したかもしれません。)

**感想2(発表者として発表後のコメント)：**発表の準備をするために協同学習について調べていく中で感じたのは、**私たちがこの授業で行っているのも、1つの協同学習**なのではないか、ということでした。今回私が担当したのは主に「協同学習」についてでしたが、それぞれが「子どもの意欲と自己の形成」の

ために様々な領域に関して調べ、「専門家」として受講者全員へ伝えていくという形は、まさに「**二重の個人責任**」があるということではないか、と思います。

#### (2) 各発表(受講者による“授業”)への感想・コメントをメールで提出する： 時間外学習その2

受講者が発表を行った授業回については、全員が感想及びコメントをメールで数日以内に筆者に提出することを求めた(発表者自身も感想を送る)。筆者が一覧形式にまとめて、補足コメントをつけて次回授業にて全員に配布する(配信もする)。勿論、授業中にも質疑応答や議論は行われるが、議論時間の不十分さや機会が得られなかった受講者からも発表者に直接「声」を届ける参加の意味がある。現実には、問いかけに終わらず、補足コメントが発表者から返される場合もある。さらに、授業を受けての学び、感想、疑問点を文字化によって明確化することが、受講者に種々の「捉え直し」を起こしている。自己内対話や過去の学び・経験の想起を促し、「自発的・能動的な学習」を動機づけ、発表者でなくとも積極的に参加しようという意識を喚起することがあると思われる。

<評価コメントより>以下、各発表への感想・コメントの記述に含まれていた記述から、理解のための思考や本授業に関する自発的学習作業の例をカテゴリーとして挙げる：

①**文献に関して：**当該発表での配布文献資料の読み直し/本授業の以前の配付資料の読み直し/自発的文献検索と紹介

②**他の回の授業・発表に関して：**筆者(橋本)の解説・問いかけへの、時間をおいての自分なりの回答/筆者による講義や以前のビデオとの関連づけ/自己の担当した発表と、今回の発表テーマとの関連づけ(分担したテーマの相互対比)/前回の発表と今回の発表の関連づけ

③**実践的場面・活動に関して：**自己の教育実習での授業経験や観察事例の想起/学校教育に関する他の大学授業等での言説との関連づけ/ビデオ視聴した実践事例への感想

4. **総括** 今回は、受講者に現職教員がいないので、発表・感想ともに自己の実践例は比較的少なかったが、それでも、テーマを分担しての「授業」式の発表と、時間外に感想をまとめる作業を求めることが、上記のような深い理解探究と、個人的営みを越えた学びへの能動的参加を促す可能性は重要であろう。